物語① 助動詞・敬語 【更級日記】菅原孝標女

ふさぎこんでばかりいる　慰めよう
かくのみ思ひくんじたるを、心も慰めむ
存続・連体　意志・終止

と、心苦しがりて、母、物語など求めて見せ

給ふに、げにおのづから慰みゆく。紫のゆかりを

見たい
見て、続きの見まほしくおぼゆれど、
希望・連用

できない　都に慣れていない
人語らひなどもえせず。誰もいまだ都なれ
打消・終止

見つけることができない
ぬほどにて、え見つけず。いみじく心もとなく、
打消・連体　打消・終止

ゆかしくおぼゆるままに、この源氏の物語、一の巻より

お見せください
してみな見せ給へと、心のうちに
尊敬

お籠もりなさった(とき)
祈る。親の太秦にこもり給へるに
尊敬　完了・連体

(寺から)出ると
も、異事なくこのことを申して、出で

すぐ　読み終えよう
むままにこの物語見果てむと思へ
仮定・連体　意志・終止

読み終わらない　嘆いている(とき)
ど、見えず。いと口惜しく思ひ嘆かるるに、をば
打消・終止　自発・連体

上京している　行かせたところ
なる人の田舎より上りたる所に渡い
存続・連体

物語②　助動詞・敬語　【更級日記】菅原孝標女

成長した事よ

たれば、「いとうつくしう生ひなりに　けり。」など、
完了・已然　完了・連用　詠嘆・終止

あはれがり、めづらしがりて、帰るに、「何をか

差し上げようか　きっとつまらないでしょう

奉らむ。まめまめしきものは、まさなかりなむ。
謙譲　意志・連体　強意・未然　推量・終止

読みたがっていらっしゃると聞いている　差し上げよう

ゆかしくし給ふなるものを奉らむ。」
尊敬　伝聞・連体　謙譲　意志・終止

とて、源氏の五十余巻、櫃に入りながら、ざい中将、とほぎみ、

せりかは、しらら、あさうづなどいふ物語ども、一袋取り入れて、

得て帰る心地のうれしさぞいみじきや。

よく心得ないで

はしるはしる、わづかに見つつ心も得

ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人
打消・連用

人も交えず

もまじらず几帳のうちにうち臥して、
打消・連用

引き出でつつ見る心地、后の位も何にかは

何になろうか（いや問題にもならない）

目が覚めている

せむ。昼は日暮らし、夜は目の覚め
意志・連体

物語③　助動詞・敬語　【更級日記】菅原孝標女

たる限り、灯を近くともして、これを見る
存続・連体

よりほかのことなければ、おのづからなどは、

そらにおぼえ浮かぶを、いみじきことに思ふに、夢

に、いと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着
着ている(僧)

たるが来て、「法華経五の巻を疾く習へ。」と
存続・連体

言ふと見れど、人にも語らず、
語らないで　打消・連用

習はむとも思ひかけず、物語のこと
習おう　思わないで　意志・終止　打消・連用

をのみ心にしめて、我はこのごろわろき

ぞかし、盛りにならば、かたちも限りなくよく、

髪もいみじく長くなりなむ、光の源氏の夕顔、
長くなるに違いない　強意・未然　推量・終止

宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめ、
あろう　推量・已然

と思ひける心、まづいとはかなく、あさまし。
思った　過去・連体